

## 7年追いかけた「獄友」から学ぶ「幸せ」

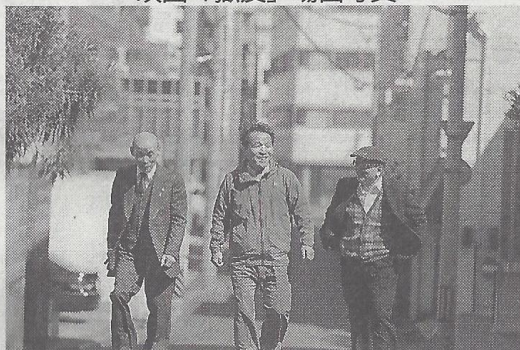
映画「獄友」場面写真



友、たちと交流を深めてきた。

「偏見と言うのかな。勝手なイメージがあった

けど、会ってみると『この人はやっていないな』とい



う「根拠」が生まれる。自分の感覚で確証はないけ

ど、確信は持てますね。それで彼らを集めたらどんな話が出てくるだろうと考えたんです」

作品を見ていると「幸せとはどういうことだろうか？」と考えさせられるものの、不思議と悲観的な気持ちにならない。金監督も言う。

「足利事件の菅家利和さんが弁当開けるのにもごもごしていたら、布川事件の桜井昌司さんがバツと開けて『ムシヨ暮らしが短いからダメなんだよ』って突っ込んでいた。彼らは工場がどうだったとか、懐かしくも

うれしそうに高校の同窓会みたいに語り合っている。当たり前なんだけど、刑務所の中でも青春があって、生きてきた証しがある。全員冤罪(えんざい)を訴えていて、石川さんや袴田事件の袴田巖さんは今も戦っているけど、それを晴らすだけの人生じゃないんですね」

布川事件の冤罪被害者で29年獄中にいた桜井昌司さんも「不運だったけど、不幸ではない」と語っていた。幸せかどうかは自分で決められる。そんなメッセージが込められている秀作だ。

※男の名言「ライナーでギューンという感じ」(清宮幸太郎)理想の本塁打について